

平和学習を題材とする生徒の主体的な活動と シティズンシップ育成の可能性を探る

中田 奈穂美

はじめに

筆者は2012年4月に現勤務校である香蘭女学校中等科高等科に着任した。この香蘭女学校(以下、本校と記す)は、1887年に英国国教会(聖公会)の宣教師であるピカステス主教により設立され、キリスト教教育が現在でも学校を支える精神的柱となっている。本稿では、筆者が担当してきた平和学習プログラムとそこから生まれた生徒主体の活動について報告を行うとともに、そこから平和学習を題材とするシティズンシップ育成の可能性を探る。

1. 本校におけるキリスト教教育について

1) 本校における「キリスト教センター」の役割

本校には専任のチャプレンがおり¹⁾、校務分掌の一つとして、チャプレンを中心にキリスト教センターが組織されている。このキリスト教センターのもと、礼拝奉仕生徒の指導(クワイヤー含む)やボランティア活動(浅草聖ヨハネ教会での給食活動、東北被災地支援など)、静想会(リトリート)、宗教講話、平和学習(広島、沖縄)が生徒対象のプログラムとして行われている。

2) キリスト教センター主催の「宗教講話」

キリスト教センター主催の宗教講話は、命を大切にするというキリスト教の教えから、命を守る現場で活躍する方を講師にお招きして講話

を頂くというものである。毎年6月と11月の年2回、HRの時間を拡大して2時間で行われている。これまでの主な講師には、秋葉忠利氏(前広島市長)、水谷修氏(教育者、「夜回り先生」)、アーサー・ビナード氏(詩人)、田中好子氏(パレスチナ子どものキャンペーン事務局長)、大石又七氏(元第五福竜丸乗組員)、川平朝清氏(昭和女子大学名誉教授)、石松伸一氏(聖路加国際病院副院長)がいらっしゃる。

この宗教講話は生徒に大きな影響を与えている。例えば、この講話をきっかけにパレスチナを支援する生徒の活動が始まり、パレスチナ子どものキャンペーンと提携してバザー等で現地女性の製作品を販売したり、越冬支援の募金活動をしたりする活動が続いている。平和学習に関していうと、秋葉前広島市長とビナード氏に負う面が非常に大きい。講話の内容もさることながら、両者にはそれぞれ広島女学院、沖縄県立普天間高校をご紹介いただき、今日の平和学習の内容に大きな影響を与えて頂いた。大変感謝している。

2. 平和学習について

1) 「広島平和学習」の概要

広島平和学習は、その他の様々な校外活動の1つとして始まったものであるが、2011年度よりキリスト教センターへ移管した。

広島平和学習とは夏期休暇中の8月に広島へ

平和研修に行く2泊3日の活動を指す。対象生徒は中等科3年生から高等科3年生の希望者である。以下に、年度ごとの参加人数とその学年ごと内訳および簡単な行程を記す。

2012年度 8名(中3:5名、高1:3名)

2013年度 25名(中3:11名、高1:7名、
高2:4名、高3:3名)

2014年度 21名(中3:11名、高1:10名)

2015年度 24名(中3:8名、高2:4名、
高3:12名)

2016年度 37名(中3:15名、高1:1名、
高3:21名)

2017年度 39名(中3:18名、高1:13名、
高2:5名、高3:3名)

2018年度 17名(中3:5名、高1:3名、
高3:9名)

2019年度 50名(中3:17名、高1:13名、
高2:6名、高3:14名)

1日目:東京駅発(新幹線)広島着 宮島へ
移動、厳島神社見学、広島市内へ

2日目:平和記念資料館見学 被爆体験
講話 平和祈念公園内碑めぐり・
交流会(広島女学院生とともに。
2013年度より開始) 宿舎にて振
り返りの会。

3日目:袋町小学校平和資料館見学 帰京
(新幹線)

基本的には上記のような行程だが、毎年少しずつ変更を行っている。例えば、2016年度は江田島の海軍兵学校を訪れ、2018年度は本川

小学校と旧日本銀校の見学をしている。生徒だけではなく教員も、前年度の行程や感想をなぞらずに、新たな気づきやその年度のメンバーならではの視点を持てるように意図している。

2) 「広島平和学習」の変容

筆者が着任した年に引率した広島平和学習は参加者8名で、事前学習・事後学習ともに行われていなかった。事前学習については、前任者の「詳細に行くと現地に行った時に調べたことの確認作業になってしまう」という考えがあった。生徒が受け取る第一印象を大事にしたいということである。しかし、2013年度以降平和学習は変化していく。

そのきっかけとなったのは、6月の秋葉前広島市長の宗教講話であった。講話中の「私たちが被爆者のお話を直接聞ける最後の世代」という言葉が生徒たちに与えた影響は大きく、この年は参加希望者が増加した(広島平和学習の募集は6月の宗教講話の前後に行われるので、直接的にも影響力が大きい)。せっかく広島を訪れるなら同世代との交流を是非行いたいと考えていたので、秋葉前市長にその旨を伝えたところ、広島女学院を紹介して頂いた。具体的に言うと、それまで現地ボランティアにガイドしてもらっていた碑めぐりを広島女学院の生徒にもらい、その後意見交換をする、というものである(これは年を追って発展し、現在では1時間程度の交流会を行っている)。

広島女学院生との意見交換から、生徒たちは大きな刺激を受けた。同世代の学生が平和についてこれだけ学び、自分の意見を持ち、行動している、という点が本校生にとっては驚きで、

本校生の行動にも変化が現れてきた。

生徒達は、広島のことを伝えたいと文化祭で展示や映像などの発表を行うようになった。2013年度は創立記念感謝礼拝において中等科3年生の2名が広島平和学習の感想を発表し、在校生の関心を引いた。また、学年ごとの学年礼拝でも生徒が報告を行った。これらの、生徒達からの発信が学校全体の平和学習に対する関心を高めて、参加者の増加を促していると考えている。同世代の活動に動かされる側面はここでもその通りである。

生徒の変化に合わせて、教員側も学習内容を変化させた。まず、広島平和学習の感想文集を作成することにした。その後、広島女学院生との意見交換のために事前学習を開始した(2時間程度)。しかし、調べたことの確認にならないよう、想像力を広げる点に重点をおいた(2015年度は原子力という観点から原発事故とその後について考えた。2016年度は行程に江田島の旧海軍兵学校を入れたので、当時の考え方を知らるために靖国神社の社頭掲示と教育勅語との関係を考察した)。

4) 「沖縄平和学習」の概要

平和学習への関心が高まったことを背景に、2017年度からは沖縄平和学習が始まった。冬季休業中の12月に3泊4日で沖縄を訪れ、沖縄の歴史と地理を知ることによって平和を考えるというものである。募集対象は広島同様、中等科3年生から高等科3年生の希望者である。以下に、年度ごとの参加人数とその学年ごと内訳および簡単な行程を記す。

2017年度 24名(中3:6名、高1:13名、高2:1名、高3:4名)

2018年度 7名(中3:3名、高1:2名、高2:1名、高3:1名)

2019年度 14名(中3:4名、高1:8名、高2:2名)

1日目:羽田空港から那覇空港へ 不屈館
対馬丸記念館(生存者・遺族の講話)

振り返りの会

2日目:南部戦跡めぐり(糸数アブチラガマ 韓国人慰霊塔 平和の礎 県立平和祈念資料館 ひめゆり平和祈念資料館 魂魄の塔・米須海岸) 宿舎にて沖縄戦体験講話 振り返りの会

3日目:嘉数高台 佐喜真美術館 沖縄国際大学へり落下場所見学 辺野古テント村見学 沖縄県立普天間高校との交流会 振り返りの会

4日目:首里城 第32軍司令部壕跡 国際通り自主研修 帰京

※下線部は現地の人からお話を聴くプログラム

基本的にはこのような行程である。2019年度は、予算の関係上辺野古見学を斎場御嶽に替え、曜日の関係で普天間高校との交流会が初日に入ったので、(現地の人々と交流をし、沖縄について考える前に交流会になってしまうため)沖縄到着後、沖縄県立博物館を訪れて沖縄

の地理と歴史を概観することにした。

沖縄平和学習の広島平和学習との違いは、まず、交流の多さである。行程の下線部で示した通り、お話を伺うプログラムが多い。それ以外でも、毎年ガイドをお願いしている池間一武さん（沖縄観光ボランティアガイド友の会会長。元琉球新報記者）からは温かみのあるお人柄がにじみで、造詣の深いお話をいただいている。宿舎の「ぎのわんセミナーハウス」はスタッフの方と距離が近く、質問にも気軽に答えて下さる。そして、参加生徒間の交流である。プログラムには毎晩振り返りの会がある。日中聴いたお話しでも、人や世代ごとに考えが違い、時には同じ高校生でも全く反対の意見を聴くこともある。その振り返りを参加生徒で行う時、疑問と思考が深まっていく。生徒たちはこの過程を通じて問題意識を高め、「伝えたい」「自分も何かしなければ」という気持ちを高めていく。沖縄の抱える複雑さや、3泊4日という日程の長さもあいまって、平和学習全体を通してこの振り返りが一番印象に残っているという生徒もいる。

4) 平和学習団体「I Peace」の設立

2016年6月、オバマ米大統領（当時）が広島を訪問した。その直後に行われた宗教講話の講師はビナード氏で、オバマ大統領の広島での演説や報道についての読み解き等を講話の中で下さった。また、ビナード氏は広島平和学習の時も我々の宿舎を訪れて様々な示唆を与えて下さった。このような背景もこの年の平和学習が盛り上がった背景だった。

広島平和学習は例年高校1・2年生の参加が

少ないのだが、その理由として部活動や10月に行われるヒルダ祭（文化祭）の中心であるため忙しいことが挙げられる。2016年度は、この高校1・2生がほとんどいなかったのと、高校3年生の多さが例年とは異なっていた。この年の高校3年生は学年全体として社会に対する関心の強い生徒が多かった。かつ、リーダーシップをとれる生徒の存在があったこと、広島平和学習時の行動班が異学年で形成され、高校3年生と中学3年生の関係性がつくられていたことが、この年度の継続学習に功を奏した。

ヒルダ祭では例年の模造紙による展示、パワーポイントによる発表に加えて、iPadを使用した広島アーカイブスの展示、折り鶴再生葉書の来場者への配布（広島平和記念館で入館者に配られるもの。製造元へ生徒が交渉して購入した）等が行われた。また、初めて平和学習団体として11月のバザーに参加し、折り鶴再生葉書を作成している「千羽鶴未来プロジェクト」との話し合いで本校とコラボレーションしたノートや缶バッジを販売した。バザーでは「国連における核兵器禁止条約に向けた交渉を2017年に開始するよう求める決議案への日本の反対」「憲法改正案について」など新たな展示が行われた。

その後も、「広島女学院生は自分たちの地元のことをあんなに考えているのに、自分たちは東京大空襲や身近な平和について何も知らない」「平和学習を継続したい」という意見が生徒から出され、勉強会が行われた。同時にこの活動を形のあるものとして次年度以降も継続させたい、他の生徒にも伝えたい、という強い意志から、「I Peace」という団体を立ち上げた。

そして1月に朝の礼拝の場で自分たちの活動を発表し、広く全校生に呼びかけを行った。3月までは本校理事長横内允氏に戦争体験を聴く会、東京大空襲勉強会、東京大空襲・戦災資料センター見学などを行うとともに、自分たちの活動を新聞にして全校生徒に配布するなど盛んに活動を行った。

2017年度はこの活動に触発された生徒達が加わってきたが、自分たちが発信する、というよりも勉強会に参加する、という考えの生徒が多く、教員主導となった。「I Peace」の活動が新聞に掲載された(東京新聞2017年6月26日夕刊1面)ことで校外からの問い合わせも多くなり、中央大学元総長鈴木康司氏や校友生の理事である関ノリ子氏、保坂久代校友会会長に戦争体験をお話しして頂く機会を設けた。

2018年度以降は身近な社会問題について話し合う活動が生徒の間で行われた。しかし、委員会でも部活でもないこの試みは生徒の主体的な活動のみで活動を継続するのはなかなか難しく、継続が課題となっている。²⁾

3. シティズンシップにつなげるために

前項のように生徒の主体的な行動から平和学習団体が生まれた。これを「(自分が) 知ること」「(ほかの人に) 伝えること」の単なる経験にとどめず、自ら考えて行動する生徒、つまりシティズンシップの育成につなげることはできないか。

ハリー・C・ボイトは「シビック・デザート」(Civic Deserts) に言及している。これは「若者が世界に関する知識と接触する市民的な場所や、自分たちとは異なる人々や、市民的・政治

的なスキルを発達させるための機会といったものが失われている」(Harry C. Boyte, 2017 = 2019: 129) 状態にいることを指している。「彼らは投票行動や市民的な慣習(制度)のような市民的関与がコミュニティのためになりうるということを恐らく信じていないのである。そういう若者は恐らく、隣人を助けたり、不公平に扱われている者のために立ち上がったといった、形式ばらない方法で他者を助けることはしない。」(Harry C. Boyte, 2017 = 2019: 130) これは言い換えると「人々がより広い世界について学んだり、自分たち自身とは異なる人々と関係を築いたり、政治的・市民的な能力(muscle)を発達させたりする場所を与える」(Harry C. Boyte, 2017 = 2019: 130) (Harry C. Boyte, 前掲書) ことでシティズンシップを育てることが可能だということである。

ボイトの言にもれず、自分の声が周囲を動かす経験をした生徒は、次の機会でも行動する意欲と実行力を発揮する。先に紹介した「I Peace」メンバーのヒルダ祭参加の感想をいくつか紹介する。「思っていたより多くの人々がすごく関心を持ってじっくり見てくれていると感じて、本当にやって良かったと思いました」「すごくよかった!! たくさんの方が来てくれてうれしかったです! 夏休みの広島平和学習で感じたことを改めて再認識することができました」「将来私たちの世代と、(見学に来てくれた: 筆者注) 今はまだ幼い子供たちの世代が日本を担っていくようになるんだと思うと、自分はこのままではいけないと再び思える機会となりました」「多くの人たちが見学にきてくれてやりがいを感じました」「広島に行き、それだけで終

わらせるのではなく、人に伝えるために自分たちが学んできたものをまとめているいろんな形で表すことができ、本当に良かったです。ヒルダ祭だけで終わらせたくないです。バザーは今回よりもっと良くしたいです」

おわりに

平和学習を通じて、生徒へどのような市民的な場所を提供できるであろうか。沖縄平和学習は12月に行われることから、広島と違って報告や発表の機会がない。できるだけ生徒が発信する機会をつくり働きかけを行っていくことが必要である。また、毎年着眼点を変えて、その年ならではの報告を行うことが聴く生徒にも発表する生徒にも大事である。自分のオリジナリティを発揮できることが自信につながり、次の行動へ踏み出す第一歩となるからだ。

2017年度は朝の礼拝発表で、自分たちと同じ年代という切り口からひめゆり学徒の紹介を行った。他には学年ごとにクイズ（関心を持ってもらうための策）をつくって教室への掲示や写真展を行った。2018年度の礼拝発表では丸木位里・俊夫妻の「沖縄戦の図」の読み解きを紹介し、2019年度は焼失後の首里城の報告と聖公会讃美歌423番「沖縄の礎に」の歌詞の意味など、現地に行ったからこそ気づいた視点を発表した。

現地を訪ねる平和学習はそれ自体がより広い世界について学び、異なる立場や考えの人々の話を聴き、質問をし、関係性を築くことになる。現地の歴史を知ることはそれだけで一つの対話である。現地の持つ力をさらに高めていくために教師にできることは、問いかけ続けて思考を

深めるきっかけをつくり、生徒とひとをつなげるファシリテーターとなること。発信の機会を提供し、行動に移すサポートをすること。役割と場の提供、そしてそのサポートが、シティズンシップ育成の働きかけだと言えるのではないだろうか。

【注】

- 1) 2019年1月にそれまでの高橋宏幸チャプレンが日本聖公会東京教区主教に就任したのに伴って本校を退職されたので、2019年4月から現在までは杉山修一チャプレンとソン・ソングジョンチャプレンの非常勤のチャプレン2人体制である。
- 2) 本稿では在校生が校内で行っている活動の言及にとどめる。校外での活動としては、卒業生を中心にした東京大空襲・震災資料センターのガイドボランティアなどがある。

【参考文献】

Harry C. Boyte 2017 *Preparing Citizen Professionals: New Dimensions of Civic Education in Higher Education* = 藤枝聡・川上英明共訳 2019 「シティズン・プロフェッショナルの方へ：高等教育における市民教育の新たな局面」『研究室紀要』東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室 (45) : 125-142.